31、余暇活動に於けるソロバン指導を試みて

国立療養所医王病院
中山　緑　　小原照子
新田節子

〔はじめに〕

余暇活動の１つとしてソロバン指導を始めてから２年６カ月が過ぎようとしている。S・50年８月、夏休みの学習介助時、４・５人の子供達がソロバンを使って遊んでいたことと「何をしても自分のほんとうに得意とするものがなく何か自信のもてるものがあったらなあ」とつぶやいていたＪ子のことばを耳にして筋ジストロフィー児（者）は指先の機能が最後まで残るということを聞いていたので指先を使ってできるソロバンに着眼し、個人指導を始めた。このＪ子がS50年11月に全国珠算教育連盟の検定7.6級に合格したことがまわりの子供達に影響を与え、自主的にソロバンをやりたいという希望児が集まったが小学2.3年生ということもあって比較的活動的ではあるが一つのものに集中、持続するということは日常観察からは余りみられず、３日坊主ではなかろうかと気がかりではあったが真新しいソロバンを片手にどうしてもやりたいという子供達の熱意に動かされＪ子をリーダーとして指導を試みた。

〔指導のねらい〕

① ソロバンを通して集中力、持続力を養う（日課の中に自然に組み込む様にする）

② 中2.3年のステージが高く機能の低い者に対しては暗算、応用問題の理解力をつける様にする。

③ リーダー格の児童に対しては検定試験を目標に練習を進めることをねらいにした。仲間意識をたかめるために練習日、練習時間、練習方法は子供達の話し合いで決めた。話し合いの結果、練習日は週３回。（面会日、行事の重なった日はしない）練習時間、ＰＭ３：00 ～４：00 まで、１人30分程度（希望によっては１時間でも）練習方法、①指の練習50～100回（ソロバンを使わない）②口頭で言った数字を入れる。③各自の練習をはじめる。小学2.3年生に対しては３人が揃うまで、又来ない児に対しては呼びに行き揃ったところで一斉に練習を始め意欲を減退させない為にも簡単な暗算や読み上げ算をし、ライバル意識や気分転換をはかった。まちがった問題に対しては再度やり直す方法をとった。又問題が出来た時は大いにほめることもわすれてはならない様配慮した。

〔結　果〕

このグループは６カ月間継続されたが①位取りの理解に欠ける。②歩行訓練、起立訓練により日課時間帯に於ける練習時間の確保ができなくなった。③中2.3の者は×算÷算、応用計算共に

3級程度は理解できる様になるも機能上、もう続けたくないと申し出た。この様な理由で中止した者もいたが現在はJ子とI子の2名が続けている。I子に関しては途中＋、－算、×÷ 算に移る段階のたび拒否したが各段階における理解力より続けられると確心したので続けさせた。
現在6級の練習をしているJ子に関しては現在2級の練習をしており、2度の検定不合格にもめげず再度検定に臨んで練習にはげんでいる。ソロバンはJ子の特技となっている。今ではソロバンの練習は2人の余暇の中に計画的に組み込まれ自主的に練習する様になっている。今後機能低下を見越し、暗算、応用問題を強化し、ソロバンと内容、方法に共通性のある簿記を指導していこうと思う。その他の子供達にも動機づけを行なっていきたい。

	学年	8段階分類法ステージ	S51年1月ソロバンを始めた動機	ねらい	練習方法	S51年6カ月たっての学習の理解度	やめるにいたった動機
男 M	小2	2	J子検定合格の影響	集中力、持続力を養い、日課の中に自然に組み込む様にする。	① 指の練習 50～100回（ソロバンを使わないで） ② 口頭で言った数字を入れる。 ③ 各自の練習をはじめる。	・1ケタの＋、－算ができる。 ・単純な2ケタの＋、－算ができる。	・起立、歩行訓練の強化により日課時間帯における練習時間がとれなくなった。
男 O	小3	3				・単純な1ケタの＋－算ができる。	
女 I	小2	3				・2ケタの＋、－算が楽にできる。	継続
女 J	小6	5	5級練習	検定試験を目標に練習をする。		・4級の練習	継続
男 E	中2	6	以前に経験があり興味があるのでやってみたい。	暗算や3級以上の応用問題の理解力をつける。		・3級程度の×÷算応用計算の理解ができる。	・機能上続けたくない。 ・だいたい基礎が理解できる様になったので自分達の必要な時にソロバンを使っていく。
男 T	中3	7	興味があるのでやってみたい。				

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔はじめに〕

余暇活動のＩつとしてソロバン指導を始めてから２年６カ月が過ぎようとしている。S・50年８月、夏休みの学習介助時、４・５人の子供達がソロバンを使って遊んでいたことと「何をしても自分のほんとうに得意とするものがなく何か自信のもてるものがあったらなあ」とつぶやいていたＪ子のことばを耳にして筋ジストロフィー児(者)は指先の機能が最後まで残るということを聞いていたので指先を使ってできるソロバンに着眼し、個人指導を始めた。このＪ子がS50年11月に全国珠算教育連盟の検定7.6級に合格したことがまわりの子供達に影響を与え、自主的にソロバンをやりたいという希望児が集まったが小学2.3 年生ということもあって比較的活動的ではあるが一つのものに集中、持続するということは日常観察からは余りみられず、3 日坊主ではなかろうかと気がかりではあったが真新しいソロバンを片手にどうしてもやりたいという子供達の熱意に動かされＪ子をリーダーとして指導を試みた。